
魔法少女リリカルなのは 阿呆と泥棒猫

サンカーン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 阿呆と泥棒猫

【Nコード】

N2101BA

【作者名】

サンカーン

【あらすじ】

次元泥棒マキと海鳴市の阿呆が出会った
そしてマキの探し物を探す事になったマキだが
そこで色々な難関に出会う
みたいな感じで

読みにくいと思いますがよろしく願います

怪我した猫（前書き）

主人公に一人称が定まらないのは仕様です

怪我した猫

俺は今学校の通学路を自転車で進んでいた

お金を貯めてようやく念願の自転車を買ったぞ！当分バス通学は無
理です

『おい！誰かいねえのか！助ける！俺を！』

何だ？宇宙からの交信か？

いつもなら無視するんだが、気分が最高に良い俺様ちゃん（電
波）の所に向かってみた

「僕を呼んだのは誰かなー？出できなー」

んー此処だと俺の小宇宙コスモが言っただけだなー

ありり？よく見ると地面に何か横たわってんなー猫か？

「おーい、ボロ猫ちゃんよーもしかして君が僕ちゃんの事呼んだの
かにゃ？つて、んな訳ねえーよな」

「いや、其の通りだぜ」

！…独り言を言ったつもりが答えが返ってきたよー…薄汚い猫
からよー

「おいおい、何時から猫が喋れる様になっただよー？この世界は
よー、ていうか君人間語喋れる？

ニヤーンニヤーンニヤー！」

「馬鹿にしてんのか？まあ？この世界？の猫は喋れないだろうな」

「何か気になる言い方だなおい」

「お前に言っても信じないだろうがな、とうがかさっさと助ける、この俺を」

何て態度の悪い奴だ、こちとら学校を遅れる覚悟で来てやったのによー

「仕方ねえーなー、この歳して持っている俺様の可愛い携帯ちゃん
で救急車呼んでやるよーこの場合動物病院かー？、動物病院の番号
知らねえから、取り敢えず普通のホスピタルでー……」

俺は赤色の携帯をポケットから取り出し三つの番号を打った

「ハローハロー、聞こえてますかー？……あ、すいませんちよつと
怪我してる人？を見つけて、救急車呼んでもらえないでしょうか？
場所は……です、え？状態ですか取り敢えず何か猫って感じですけど
……いや違うんです猫じゃないんです、喋る猫の様な生物なんです、
はい……いや、ふざけてないです、真剣です……いや別に僕、頭打
つてないです、どうしてそんな事聞くんですか？……ふざけないで
ください
いいから速く来てください、ハリー！ハリー！それでは」

そう締めくくり俺は通話を切った、そして猫の方に振り返り

「やばい、このままだと、お前では無く俺が救急車に連れてかれる、
黄色い」

「当たり前だろが！」

「とりあえずー逃げようなー」

俺は片手で猫の首を掴むと自転車の方に走った

「この持ち方やめろ！悪さした猫か！」

「うるせーよー今、自転車に乗るからよー！」

俺はこのボロを自転車のカゴに突っ込んだ

「ふぎゃー！」

「行くぜ……………ギア…1…」
自転車のな

俺は自転車を駐輪所に止めるとマンションを駆け上がった

家で風呂を浴び、サツパリした所で猫に聞いてみるかー

「たつくよー手前のせいで僕ちゃん学校サボっちゃまったじゃねえーか、つかお前腹減ってただけかよー」

「けっ！別にいいだろがあんなかつたるい所行かなくてもよー」

同意見だが

「ていうかさ、お前何物で、何で喋れるのか教えてくんない？」

「いいぜ、管理外の世界の野郎にも分かる様に教えてやるよー」

「へー、そげなことホンマにあんのかー」

何か世界は幾つもあったて、当然それを管理する奴もいて、魔法と言
うのもあつて

自分は実は人間とか

「あれまー、何か色々聞き過ぎて頭痛くなってきたぞー、何言つて

るのかわかんねー」

「あ、倒れた」

俺の意識がシャットダウンした

「で？何でお前は这个世界に来んだよ？」

「探し物だよ」

「探し物ー？何か怪しいなー」

そこで猫がニヤリと笑うと

「正確には俺が盗んだ物だがな」

「おいおい、泥棒かよー勘弁してくれ」

「け！管理局の連中と同じ事してるだけだ、俺は売ってるがな」
違う気がするが……

そして察しの良い俺様ちゃんはいいつが何を言いたいのか分かってきた

「んで？そこまで自分の事を話ったて事は……」

「俺に協力しろ！」

「ですよねえー」

協力ねー、ん？協力出来るということとは

「もしかして僕様ちゃんにも魔法が使えんのか？」

「ああ、才能があるわけじゃないが」

「まじかよ」

その……私様にもリンカーンゴアックがあんのか

そうだなあー

「7!」

「あん?」

「分かんないの?」

「金を10とするなら、お前は3で、俺が7な」

猫はポカンとした表情をした後、怒り狂った

「はあ!ふっざけんな!却下だ!却下!」

「でもー、お前は俺に頼んでるって事は今、魔法つかえねえーんだろー?」

「ぐっ!……だけど7は多い!せめて4だ!」

「嫌だねえー4は死みたいで縁起悪いしよー」

「じゃあ、5!5でどうだ!」

「いいぜ、それで、タダ働きではねえーならな」

「畜生!運悪いぜ!」

あーそういえば

「俺の名前は琢磨つーんだが、お前の名前何て言うの?ミケ?」

「噛みちぎるぞ……マキだよ」

「覚えたぜーマッキー」

「マキだ!」

「分かったぜー、牧田」

「だれだよ、それ!」

猫魔法使いマキと海鳴市の恥とのコンビ結成の瞬間だった

街案内

「んで？探し物って、どんな探し物何だよー」

肝心の事を聞いていなかった俺様くんはマキに質問してみた

「ロストロギアの話はしたよな」

「ああ、したなー」

「それを盗んだんだが、……途中で暴走してな、止めようと思ったら、ロストロギアと一緒にここまで飛んで来ちゃった、それでリンカーコアが傷ついて魔法を使うのは不安定だし、ロストロギアは力ラスに奪われちゃった……そこにお前が来たんだ」

ロストロギア

過去に何らかの要因で消失した世界、ないしは滅んだ古代文明で造られた遺産の総称。多くは現存技術では到達出来ない超高度な技術で造られた物で、使い方次第では世界はおろか全次元を崩壊させかねない程危険な物

「つーかささつと見つけないとやばくね？」

「いや……まだ、大丈夫なはずだ」

「不安になんなー」

俺以外の奴が死んでも特に困らんが……海鳴市だけ奇跡的に残らないかのー？

それから魔法の使い方やデバイスの使い方などをレクチャーしてもらった

P i P i P i P i !

「んにゃ？電話か？」

番号を見ると学校からだった

「そついやサボっちゃったなー……まあ、いいか……よし！さっそく探しに行くぞ」

「やる気だな」

「ついでに道案内だなー」

マンションを降り、マキをカゴに突っ込む

「フミヤ！」

「行くぜー！全速前進！」

「ここは古本屋だ、しかし少年漫画と少量の小説しかなくて、僕たちは余りいかねえー」

「俺は本は嫌いだ」

「ふーん、もつたいねえー、おっ！海人ゴンズイが売ってる！ラッキー！」

「……………本当に品揃え悪いのか？」

「ここは、公園だなー奥様方やそのアホガキ共がいる」

「お前も変わらないだろ……………」

「ん？何か、奥様やガキに見られてんな」
「この時間にお前がいるのをおかしく思ってたんだろ」
「何だ！手前ら！言いたい事あるなら言えや！見てんじゃねー！」
「大人げない！」
「んだとー！俺は小学3年生だぞ！」

「ここは海だなー」
「ほー、綺麗だな」
「特に説明する事ねえーな」
「…そうかい」

「ここは翠屋って言う美味しいお菓子を売ってる場所だな」
「へー、買ってけよ」
「だけど、ここには魔王がいるんだ」
「ラストダンジョン！？」

「あ！琢磨君！」
「んあー？高町さんじゃあないですかー？」
「学校に来てなかったから皆心配してたよ」
「時間に縛られんのは好きじゃねえー」
「……それだと何処にも就職出来ないよ」
「実は俺はいい事してたんだよー」
「露骨に話逸したね、……いい事？」
「ほい、この猫助けたんだー」
「これって……イリオモテヤマネコだよ！」
「え？不味かった？」

「絶滅危惧種だよ！西表にしか居ないのに………密猟してきたの？」
「殴る蹴るの暴行を加えるぞ」

「まあ、ざつとこんなもんだー」

「大体把握したよ」

ふうーやつと家に帰れる

「ただいまー」

「琢磨ー！学校サボっただろー！」

家の玄関に着くと、扉から同居人のデブが出てきた

「デーブ、お前は何を言ってるんだ俺は学校へ行ったぞ」

嘘だが

「デーブって言うな、嘘つかないでよ、僕と同じクラスなんだから分かるよ」

「そんな事より飯だ飯」

「飯！！」

「あつ、馬鹿」

「作っただけど、って猫が喋ってる！」

結局この後デーブにに事情を説明するやら何らで、いざ食べようと思った時にはすっかり飯が冷たくなっていた

マキ………許すまじ

空、飛ぶ

「だからよー、デーブも協力してくれよー」

ご飯を食べて歯を磨いた後、俺はこうしてデーブをお願いしている

「別にいいけど……あ！もしかして僕にも魔法使えるとか！」

協力を得られたが、期待に胸を膨らませているデーブにマキが期待を見事に裏切った

「無理だな、リンカーコアさえ無い」

「ああ……そうですか……」

ブランド物買ったたら偽物だった並の落ち込みようだ

「でも！……一応、探してみるよ、どんな形なの？」

「赤い宝石みたいな形だ」

「宝石ねーん」

と、思ったらすぐに復活した、こつこつ所好きだぜふと、何かに気づいたようにマキが疑問を口にした

「そっいえば……もう9時だが、お前らの親は帰って来ないのか？」

そこで俺は何か耐えるな顔をした

そしていつもの巫山戯た口調ではなく、事情を説明した

「まあ……生きてれば……この時間に帰ってくるだろうな………」

マキは気まずそうに顔を逸した

「その……何か、ごめんな………」

「いや、いいえ」

「……亡くなったんだ」

「いや、生きてるよ?」

「生きてんのかよ!今のかなり気まずかったぞ!」

「やーい、だーまされーた」

「さてー、そろそろ風呂入ろう」

俺はマキの首根っこを掴むとデーブと一緒に風呂場に向かった

「今日さー怪人ゴンズイの初版買ったぜー」

「えー、また無駄遣いしたのか」

「いやーお金はやっぱりある時に使わないとねー」

「はあ〜」

頭を抱えてどうしたんだ？

「そんな事よりさー、マキー後で空飛びに行こうぜ」

「そうだな、慣れた方が良い」

「あー！良いなー」

そんな恨めしそうな目で見られてもなー

「分かったよー今度お前の腕掴んで飛んでやるよー」

「本当！」

「ホントさ、ホント」

「楽しみだなあー」

場所は変わり此処は昼来た公園

僕様ちゃんは今もうsetupした状態だ

デバイスも盗んだ物らしい

これは人格が無いが人格がある奴もあるらしい、こえー

「しかし変な格好だな」

「えーナウいだろ？」

今の俺の格好は学ラン、そして頭にトナカイの頭の骨を被っている
学ランの下に何も来てないのがポイントだ

そしてデバイスの形が良くわからん

見た目には片方の目が青色になっただけなんだが

マキが言うには人体から魔力を放出できるらしい

「よし！早速飛んで見る」

「OK」

こんな感じかー？

「？うっ、おっ。おっ」

俺の体が浮かんだ

そして10分後俺は空を縦横無尽に動き回っていた

「ふはっ、ふははははは！！ナにコレ超楽しい！」

と、あかん子の様に笑うぐらい楽しい

「あはははははは！！素晴らしいじゃあねえか！見る！人がゴミの様だ！」

「おいおい、テンション高すぎだろ」

「楽しい！楽しい！素晴らしい！herlich！」

「落ち着け！」

この後30分くらいこうしていた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2101ba/>

魔法少女リリカルなのは 阿呆と泥棒猫

2012年1月6日11時47分発行